

## 結 び

福生市は市制施行二四年になろうとしている。平成二年七月一日、市制二〇年を祝う集いが市民会館で開かれた折、「輝く街、福生」をめざして、Active, Creative, Challenging（行動的、創造的、挑戦的）という合言葉が提唱された。三つの言葉が英単語であったところに、若者たちの現代的感觉にマッチすることを意識した跡がみえるが、一面では福生市が歴史とともに背負っている、特殊な国際環境を反映しているようでもあった。

経済成長が停滞し、政治・社会状況も沈静ないし低迷している現在、福生市にかぎらず保守的な雰囲気全体をおおうようになってきた。しかし本市の人口増や住宅建設の動きなどをみているかぎり、いわゆる都市化の波はややゆるくなったものの、その歩みを止めた訳では決してない。東京の大都市化の枠に、早くから包まれたわが福生市は、これからはいわゆる生活環境の整備とか、生活の質的な充実を目指すための、ソフト面での向上が要望される時期となったようである。

しかし経済変動と、それにとまなう社会的風潮の保守化傾向は、歴史的、循環的なものとはいえ、いつまでもそこに浸っている訳にはいかない。歴史的にも、例えば近世後期の、明治期の、あるいは太平洋戦争後の市域住民が、いかに生き活きとしていたか、その例証は一々挙げるまでもないであろう。

周知のごとく福生市は、隣あう二か村が合併してできた市である。『武蔵田園簿』（一六五〇年頃成立）で調べると、八王子市の五九か村一町、青梅市の三四か村などとは較ぶべくもないが、二か村で現在の行政区域を成しているのは、

日の出町・国分寺市・国立市・小金井市などである。だが福生市を除く多くは、享保以後開発された武蔵野新田の村を加えており、事実上数か村を含んで成り立っている。市域も、これらの市町に較べてせまい。

だが、わが福生市は、ゆるやかな起伏の地勢をおおう緑と、多摩川、玉川上水の清流に恵まれている。四季を通じ、多摩の横山の夕景は、何処よりも美しい。この好環境が、市民の活力と明朗さの基礎である。これを守り育てようとする気持が郷土愛の源泉である。我々の父祖は、他に誇りうる歴史をこの地に築いてきた。

多摩川や武蔵野台地に狩猟し、わずかな土器や住居址しか残していない縄文時代の人々から始まり、律令国家の租・調や、防人となって長途の庸役を強いられ、あるいは武蔵国分寺の伽藍造営にかり出された古代人たち。中世には、いざ鎌倉へ南北の交通路を多摩川沿いや武蔵野に開き、南一揆の騎馬が走り、後北条氏が進出してからは、滝山・八王子に労役や貢物を運んだ人々も多かったであろう。近世に入ると、福生・熊川両村はその姿を一層はっきりとさせる。幕府領、旗本領とわずかな寺領もあったが、事実上二か村の生活は変わらなかった。田畑耕作、多摩川の漁業、玉川上水の御用のあい間をぬって、農民たちは新たな産業を模索する。そして幕末開港の衝撃と混乱の波は、江戸から一〇里余（四〇キロメートル弱）のこの地まで押し寄せる。

近代に入ると数度の管轄区域の変動を経ながら、昭和一五年に福生町が成立するまで、養蚕業を興して横浜・八王子と結びつき、あるいは藍葉や茶など新しい生産を興して東京との連繫を深めてきた。そのため神奈川県から東京府への境域変更にあたって、とまどう人も多かった。しかし同時に、前代より受け継いできた高い文化への憧憬は、これら大都市から受ける政治、経済の影響とともに、反響する文化運動となって、今日に及んでいる。

日清戦争以後、約一〇年おきに続いた対外戦争の中で、福生は銃後の農村として生産に励み、青壮年を戦場に送り、

農業に必須であつた草原の大部分と耕作地すら、軍用地として提供せしめられた。またそれ故に、空襲の被害をも受けねばならなかった。

太平洋戦争が終結して五〇年、人心のすさみと荒廃から、福生・熊川の青年たちは郷土の再生へと立ち上り、多様なサークル活動と学校を他に先がけて復興した。だがかつての軍用地は米軍基地として続き、朝鮮戦争からヴェトナム戦争へと続く長い期間、市民は不安の毎日を送らねばならなかった。今、平和がよみがえったと言われながら、なお騒音問題などが安全保障の問題とともに併立している。

東京の都市機能が拡大するにつれ、地域の産業も工業化をまじえながら多様となり、サラリーマンのベッドタウン化も進んだ。それは新しいタイプの市民を迎え入れ、市自身が現代都市化する過程でもあろう。だが、わが福生市は、荒野にある日建てられた町ではない。悠久の歴史の上に築かれ、豊かな文化遺産を有する市民の街である。

だからこそ、緑と水に象徴される自然の環境を大切にする。それは祖先から引き継いできた祭りや年中の行事、人生の節目のならわしを大事にして、伝統的な生活のリズムを子供たちに伝えていくことも相まっている。その中から七夕祭りなど、すでに本市のリズムとして採り入れられているものもある。昔日の伝承や伝統の保存、活用は、これを積極的に再生し、市民生活に新たな採用を図ることによって命脈を若返らせることができる。現在六万二〇〇〇の福生市民には、それを可能とする力がある。

わが福生市史の筆をおくに当り、われわれは昭和二〇年代のわが町に流れた歌詞の一節を、思い返すこととしよう。敗戦後、日本中がうちひしがれていた中において、西多摩郡の先頭切つて郷土と祖国の再建を誓って活動を始めた、福生・熊川の青年たちが愛唱した歌である。いわく、

「歴史はめぐる昨日今日　古き日本よいざさらば  
多摩の流れは清くして　自由は今や吾にあり　理想のもとにいざ行かん」と。